

# 春燈



12  
月号

安住 敦の句

はつはつと白きは辛夷ここは信濃

句集『午前午後』昭和四十七年

昭和四十年五月「春燈」第一回勉強会が開かれた。参加者四十三名。一泊二日で句会五回。まさに勉強会。掲句は、軽井沢小瀬温泉（七句）の冒頭の句。「はつはつ」は「端端」、わずかに現れるさまのこと、新緑の高原の五月の光の中に開き始めた辛夷への讃歌である。下五の「ここは信濃」あつてこそ「景の中に人がゐ、人のうしろに景がある」の敦諷詠句の完成を見たのだ。

柴崎 富子

久保田万太郎の句

水仙の水替へ海綿の水も替ふ

スポンジ

句集『午前午後』昭和四十七年

前書に「春燈」主宰と言へば聞えよけれども。とある。昭和四十五年五月号に初出の句。万太郎逝き主宰を継承し七年目。会員数は八百名を超えている。企業に譬えるならば八百名の社員を抱える社長なのだ。その社長自らが机上に活けられた水仙の水、指先や切手等を濡らす海綿の水を替えている。会社なら秘書の仕事なのだ。前書に自嘲を含む先生の日常の一端を垣間見る句。

松橋利雄

# 西ヶ原日記 (三五)

鈴木榮子

消えてしまひたい日もあり綿虫も  
独り住む靴に蟋蟀入らしめて  
二十世紀多漿の指を滴りぬ  
葡萄自家製シャーベット冷凍頼り  
いつよりか柿の胡麻斑のつひぞ見ず

二十世紀発泡スチロールでふ保護包み  
速達一通一通来るに秋果を以て労ふ  
無花果のあな気味悪と饅えしめし  
紅唇に実石榴透明歯並に似  
曼珠沙華愛好家増え白きもあり  
春燈六十周年の年逝くよ  
平和とは美丈夫のゐて御輿昇く

春星賞受賞作（20句）

草 矢 久保久子

白南風や紆余曲折の川の照り  
草矢射る浄土の夫の胸元に  
貝風鈴水の碧さを恋ひにけり  
灯涼し遺品の竿の手ずれかな  
七たびの迎火惹なく焚けし  
ついと来てついと消えたり夕あきつ  
かなかなや見慣れし山の影深む  
晩年を添ひし山莊薄紅葉  
余命告げず看取りし日々や虎落笛  
抗へぬ訣れの記憶霜の花  
ひたむきに尽ししことも冬の星  
光陰の妙葉なるや冬至風呂  
去年今年七色まじる砂時計  
初鏡たつぷり刻をかけにけり  
小豆粥ふつつ命愛しまねば  
しろがねの辛夷のつぼみ天を指す  
残る鴨いとしむ羽をたたみけり  
過ごしし日確とこころに垣繕ふ  
歩みきし夫との径やかげろへり  
ときめきに齡のあらず初ざくら



春星賞佳作（20句）

## 送り火 秋場貞枝

ふるさとの山河集めて星まつり  
満載の祈願七夕竹撓ふ  
梶の葉の恋ひせし夫の辺に揺るる  
迎火や木戸も座敷も放たれし  
焙烙の素焼を染むる門火かな  
茄子の馬紺のしたたる駿馬かな  
棚経の僧衣に纏ふ伽羅の風  
盆僧の昔ばなしや般若湯  
道の辺の鉦の響きや地藏盆  
地藏盆子らたくましく仕切りをり  
野に川に万霊供養施餓鬼幡  
芋殻折る音に別れの火影かな  
白檀の一片母の送り火に  
流灯の波にさからふ戻り舟  
父母呼べば風に瞬く精霊舟  
尼寺の雨は絹糸沙羅の花  
如意ヶ岳天狗設ふ施火の床  
妙法の二ヶ山繋ぐ火なりけり  
筆太に燃えて歪みし大文字  
大文字や洛中洛外ほとけの徒

春星賞佳作（20句）

## ふるさと 斉藤みちよ

灰撒きて動き初めたる越の春  
手掴みの花菜の束を貰ひけり  
納屋開けて燕を放つ里の朝  
田を植系に帰る楽しみありにけり  
実直に進む田植機四町歩  
夕焼に野良着干す背を伸ばしけり  
早苗饗やまづは籠へ酒供ふ  
白南風や刈羽三山観て昼餉  
母います限り欠かさぬ帰省かな  
鶏小屋の軒も玉葱吊る暮し  
すぐなじみ訛に戻る盆踊  
はらからの揃ふ座敷や盆の唄  
米山も佐渡も影濃し十三夜  
手にとりて稲穂と話す男かな  
つぐらつ子稲刈る母を目で追へり  
稲刈や母舐め呉る指の傷  
標の踏み跡歩む登校児  
チヤンネル権まだ父にある炬燵かな  
母の手へ今日いちにちの餅菓  
米山の尾根のけぶりて春隣

爽  
籟

西山浅彦

爽籟や翁媪の手をとりて  
もののけとひとこと交し曼珠沙華  
山の音野の音恋し鹿火屋守  
また出でて稜線仰ぐ鹿火屋守  
浜菊や器量すぐるる海女二代  
松韻のかすかな軒や後の雛  
誓文払売れつ姉妹連れ立ちて  
父祖の血の今なほ光る月夜茸  
菊襲うれしき沙汰の重なりて  
店蔵にねむる甲冑露時雨

移  
ろ  
ひ

小  
張  
志  
げ

だらだらまつり女の願は短くて  
くるぶしを見せて勝気な秋裕  
ほろ酔の帯の兎も月の客  
十三夜羽織重たく人を待つ  
べつたら市麴の染みを許しけり  
裂織を着て紛れけり紅葉山  
干し上り手熨斗で済ます神の留守  
負真綿病みて稚児の重さほど  
着ぶくれてまだ少しある羞恥心  
鏡中に母を見てゐる除夜の鐘

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 久保 久子

胡麻たたく伊吹高嶺の雲飛ばし

われからや余呉の湖辺のそぞろ雨

草の花母の乳に似る土饅頭

蛇穴に本意を糺すことはせず

寄り添はねば通れぬ小路十三夜

○ 生方 義紹

湯中りの字余りめける草雲雀

すいつちよや悍馬の鳴らす厩栓棒

山なりのボールとどかず赤のまま

目一杯殺気孕める小かまきり

どつてこのきのご楽隊賢治の忌

○ 荻野 嘉代子

御神酒所に一日氏子秋祭

どんぐりの青きまま落つ賢治の忌

志貴皇子のかをりせめても秋の寺(白幡寺)

「子を取ろ」の子を羨しとも鬼の子は

柚子坊の肥えるにまかせ百花園

○ 石川 龍士

寂として人情嘶秋の夜

草葎に媼の鬻ぐ走り蕎麦

秋の声「塔のへつり」へ足のばす

陸奥は今黄金波打つ厄日前

秋高し豊旗雲の鶴ヶ城

○ 市川 玲子

露草のこぼるる露を供へけり

秋の夜の夢紡ぎけりチュチュの精

錦秋の京への思ひ募りけり

鞍馬火祭老いの二の足踏みにけり

色鳥や俳誌に出会ふ旧知の名

# 春燈の句

鈴木 榮子選

ベランダに酒席調ふ火花かな

千葉 小田切明義

一管は背に挿し吹ける踊笛

昔手形今パスポート鳥渡る  
掬巖しき関所の格子冬隣

流星や藻屑と消えし平家悲話

五百羅漢顔それぞれに秋を待ち

子の重み肩に受け止め遠火花

つつましき年金暮し秋桜

鳥渡る小花買ひゐる道の駅

千葉 横田 初美

日の欠片ちりばめ秋の陶器市

村芝居声裏返る立女形  
居候鈴虫一家声高し

秋うらら陶工の技貰ひけり

追伸に聞きしばかりの鴝のこと

ひとつ家に灯を異にして虫の夜

黒猫の赤き首輪や野菊暗

捕物帖旅行かばんに秋の旅

東京 馬場 宏

穴惑ひ「星の王子」の美術館

握り箸正す箸あり栗の飯  
暗算の右脳訓練秋灯

あぶれ蚊の鼻のあたまにとまりけり

悲話秘めて葛花咲けり磯の浜

落栗や若草山の野天風呂

静の碑や秋思の人を去らしめず

子離れの出来ぬ親たち猫じやらし

東京 山口 地翠

べた風の浜に色なき風過ぎぬ

秋の声聴かな浜辺の鳴き砂に  
丹後路の史跡つなぎて風は秋

京都 四方ハツ子

東京 宮沢 治子

千葉 島田 山流



# 余言

鈴木 榮子

「子を取ろ」の子を羨しとも鬼の子は 荻野嘉代子

「子を取ろ子捕ろ」は子供の遊びで、一人は鬼、一人は親、他はすべて子となつて順々に親の後につかまり、鬼が最後の子を取れば、代つて鬼となる、という遊び方。

「鬼の子」はミノムシの異称で「枕草子」で「鬼のうみたれば」と言われてしまつていと哀れである。

それで作者は鬼の子なる蓑虫が、子を取ろの遊びを見て親も欲しいし友達も兄妹も欲しく恋しく羨ましがっているであろうと思つたのである。まことに希有なことで蓑虫に教えてやりたい句である。面白い句に出合つた。

このようなフィクションの句でもお伽噺のような句が出来る。俳句ならではの世界だ。

秋の夜の夢紡ぎけりチュチュの精 市川 玲子

チュチュはバレエの白鳥の湖だのジゼルだのに女性のバレリーナが腰につけている紗の短いスカートである。

あのコスチュームを付けるとたちまち白鳥の湖が舞台の上に出て来上つてしまう。チャイコフスキー作曲の組曲がいつど

こから聴えてきても四人ずつの踊子の場面が眼に浮かぶ。夏の夜の夢に対して秋の夜の夢を紡ぐチュチュは好対象である。三十六回転回り終えピタリと止まるプリマ・バレリーナは見事だ。

紫蘇の実や少し足らざる生活よし 齊藤みちよ

「少し足らざる生活よし」などという句、中々詠めない。私も同感だ。切羽つまつている訳ではない。

これと賄えるのであるけれども、余計なものは買わないでよいと思つた。

年末、ユニセフ協会から募金お願いの便りが来る。これを出して頂くと、赤ちゃんに何々がどの位援助出来ます」というと、ご協力いたしたくなる、そして貧者の一灯をとますのである。

遁走の向きを違へり衣被 上野 進

衣被は里芋の皮をむかずていねいに洗つてそのまま茹でたもの。味は淡白で中々素朴な美味しさがある。

衣被とは衣を被く芋と佳い名を貰っているが、皮の野趣を見ると小動物がいまにも動き出しそうな感じである。

そういう形から遁走という想像も出て来たのであろう。または皮を剥くとつるり滑るので、それを遁走といったのかも知れない。